竹取物語

貳初編

へ13
3052
1

京山著作
國貞畫
初へん下

竹取物語初編上

京山著作
写真画図
森治板
丹取扨次編下

48
へ13
3052
1-7
特
へ13
3052
1

春雨のつまぐる物語の親ありと源氏わらひ竹取をよ
ゐ人をやとも傘の雫ゝ屋のあるゝ来らそとさしたる
本と見ゝ此竹取とをとして例の新作をとゝ竹をそ
べ元種にうけまと筆採る春の初あれぶの三清を壽て門の
松若と庭の梅若とを時代と世話を經合しうへ殖屋が歳
玉の盆養とやゝ元佛の石は鉢を硯と火鼠の毛と筆せ
ゐる短才の作るまゝ詞ゝ玉の枝いるけれど画工ゝ名ゝ珠
を磨けり從来こやと貝紙ゝ土ゝ稚子の伽さうしゝ
根もなく葉もなく竹取の処ゝ

同初冬上梓
發兌

山東庵京山識

發端

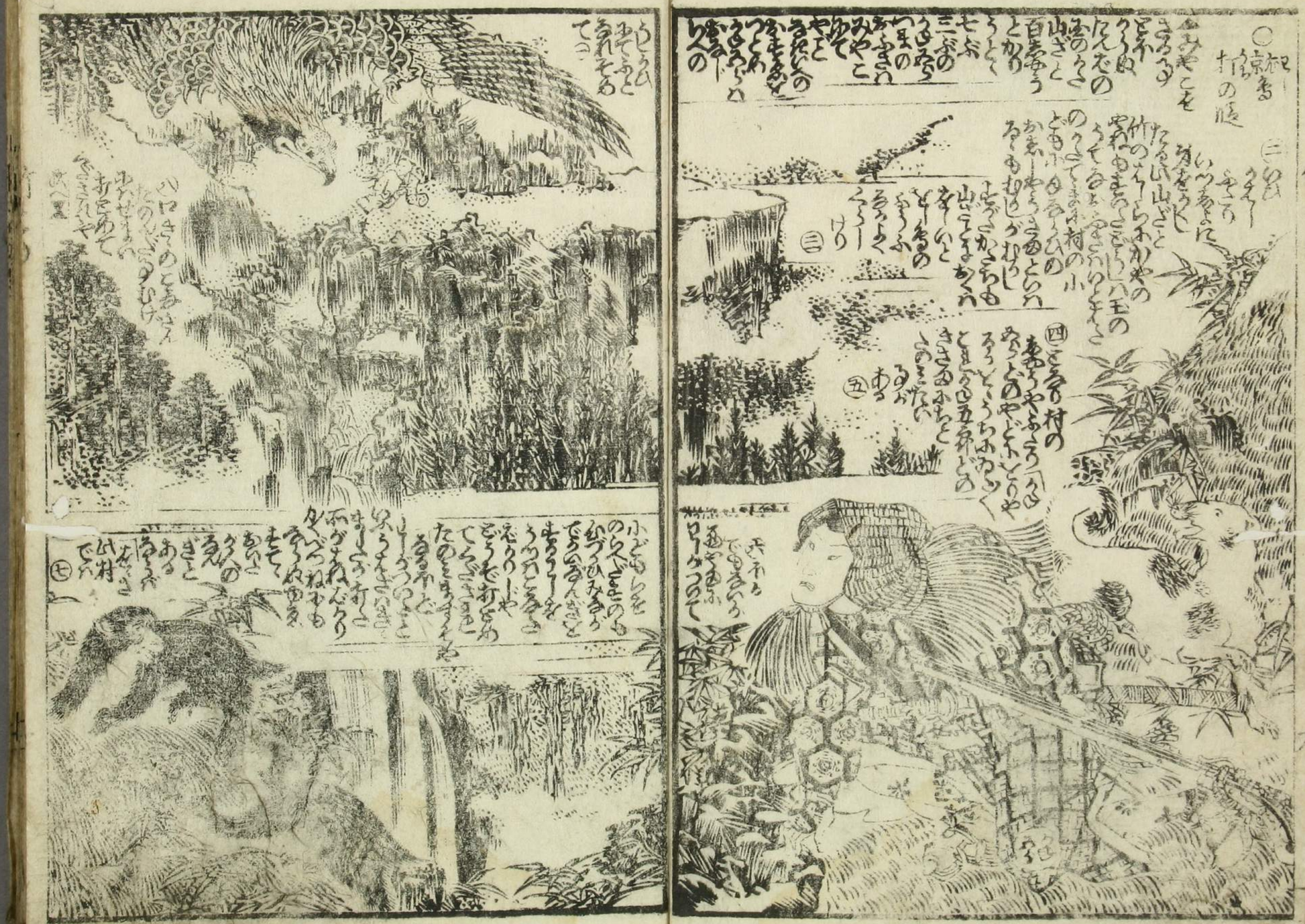
竹とられ

京五条坂
つぢめ
やの
小安
間国の
修行者
五条坂のけいせい
黄金屋の
玉の枝

竹取の
公羽が
娘
竜王
山賊
火鼠の
皮
五郎
吉田の
少正公連
梅若丸
吉田の
下部
仏の
鉢
助

○竹六やど
の図
竹やどの

初せ
松若
ひなのまん



京山作
國貞画

美艶仙女香
黒油美容香

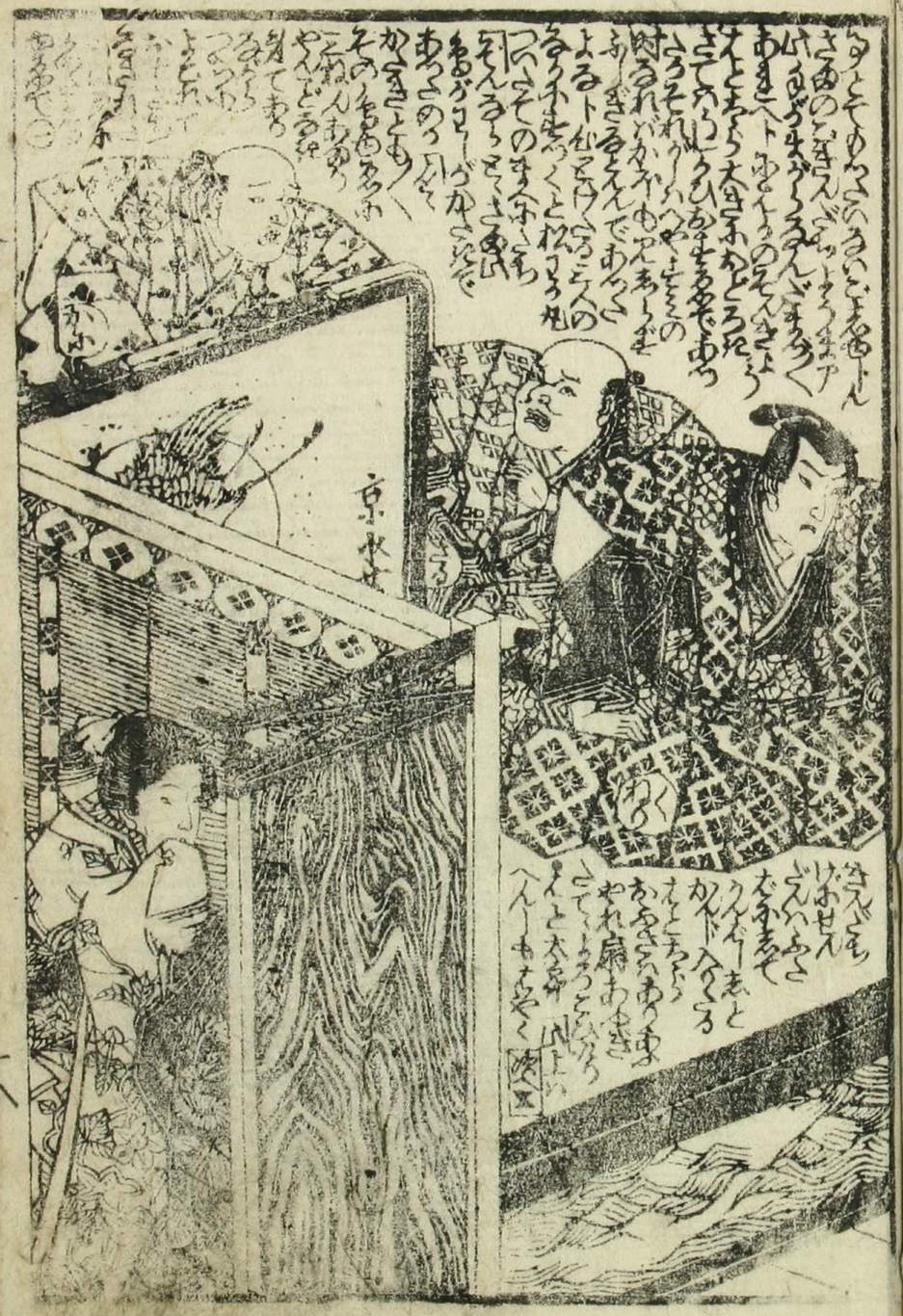
千松
ろものの
うそうそ
てけるを
あそうせや
あいと
(一)

(二)
(三)
(四)

○松原の浪

竜

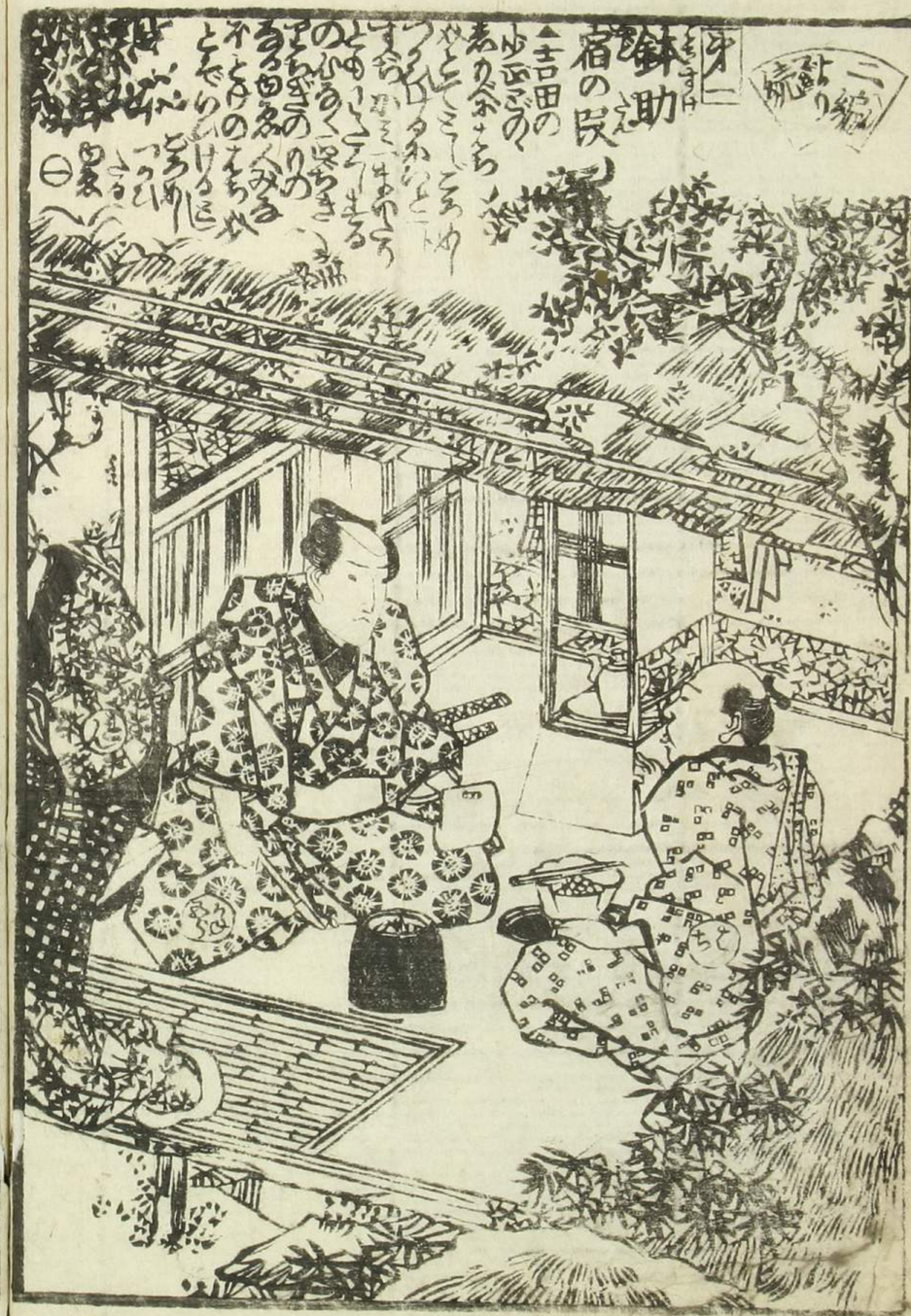
鷲



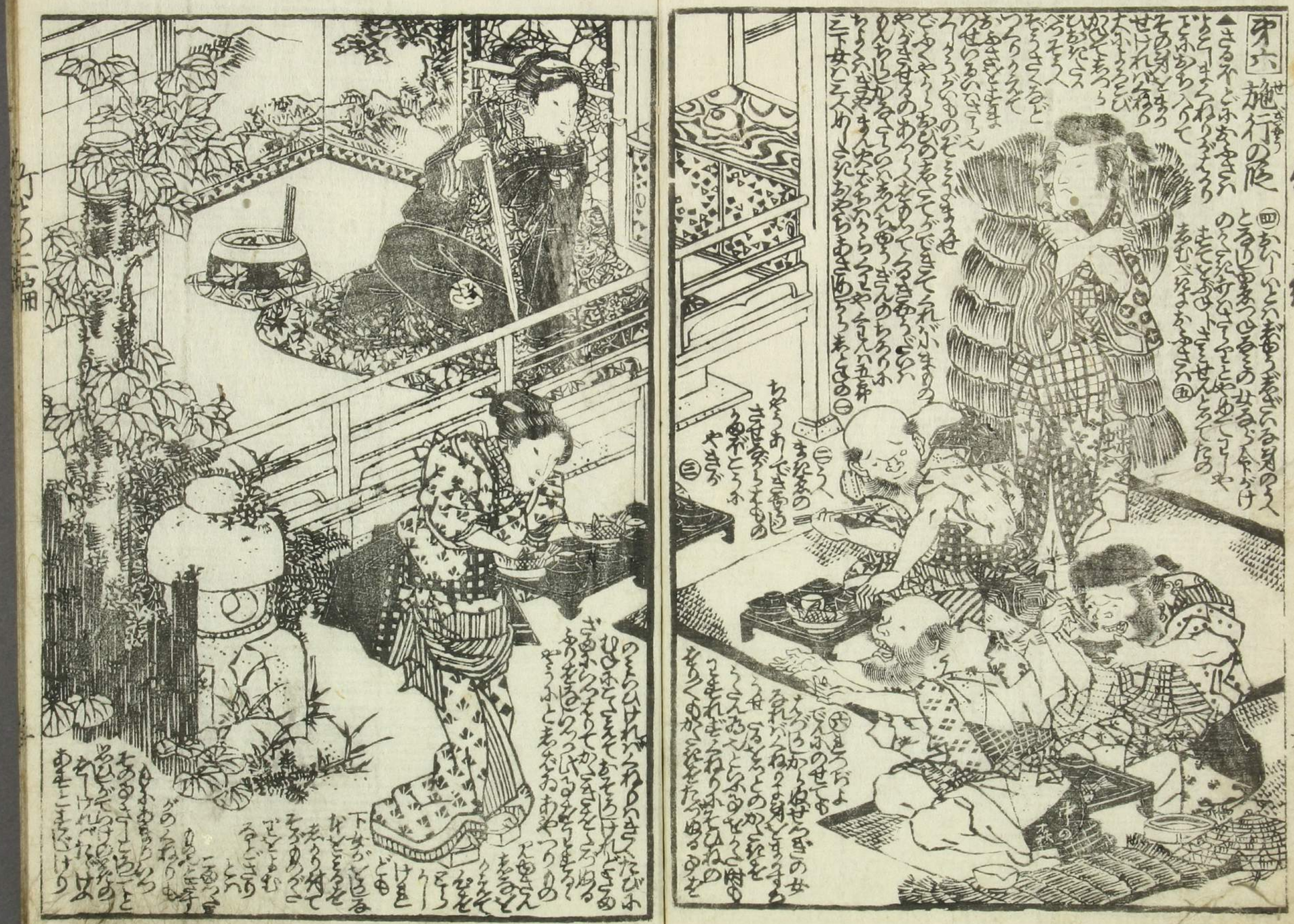
京山作
國貞画

兼五郎の妻
尾總
竹細工の籠
竹とり社
むすめ
かぐや
姫百合の
小菊の中丸
花のもぐさ
吉田の少正
涼山

百姓
兼五郎
蟹藏
猿二郎
蝶吉
非人
梅若丸


二編 釣り続
第一
鉢助
宿の段

目上 江戸京橋京橋
百せん
五十六せん



其二

▲ある日まのでくまこーま
けれがなきらひけらあまさが
るるらとあ石ら日ゑをとい
のるあかひゑとも八ちや
めとくらせてとのあま
くねりぬふうえれがくあ
まつくゑろぬはるーんと
もぐさる二百人まるどうのちやめ
そまぐじゃからひつけ目めのけさ石ちあうと
りせんへゆこをのどけれがゆの日ゑさ
よりあまくこのひゑとどもさてうれい
ぬをまむうるをあきすれをるそ
まてうをせけりひゑとも大ふ
よろこびうをぎとるーてうら
しろつふせんをまろひゑとも
さあくのさをまるかあきこ
いゆえのえふふけくるまぐ
まのうけふたちのでのーや
ろ死のてうりもあーんうとみと
まをてきてあくう
ひゑるるるーびくるるーろうこ

京山作
國貞画

▲ゑまたをそとてよたちうこををちんふちのゑ
やうをそとくきうことあゑ人とも山ゑをそとゑは
ちーくめつこふちのゑ見えもくるーくねうころ
ゆうがとちまあれとーきうこのゆきえまーまう
わうをとんまありーこておーやトもごちろく
ちををとこをるさてくゑーくあうこうれも

きうきをしぶひゑ
とゑるるさけ
るゑ身のをてそ
そやそをもも
はうさ見ゆ
のがちその
身のつふを
さて感思
ゆやをあの
えををゆう
るれをうう
きをーぐの
のえんも
きりをてい
あれとさる
ゆきうえあ
五オ の面ひ
あつのふ二け
さををふつけ
あのてまたハ㊀

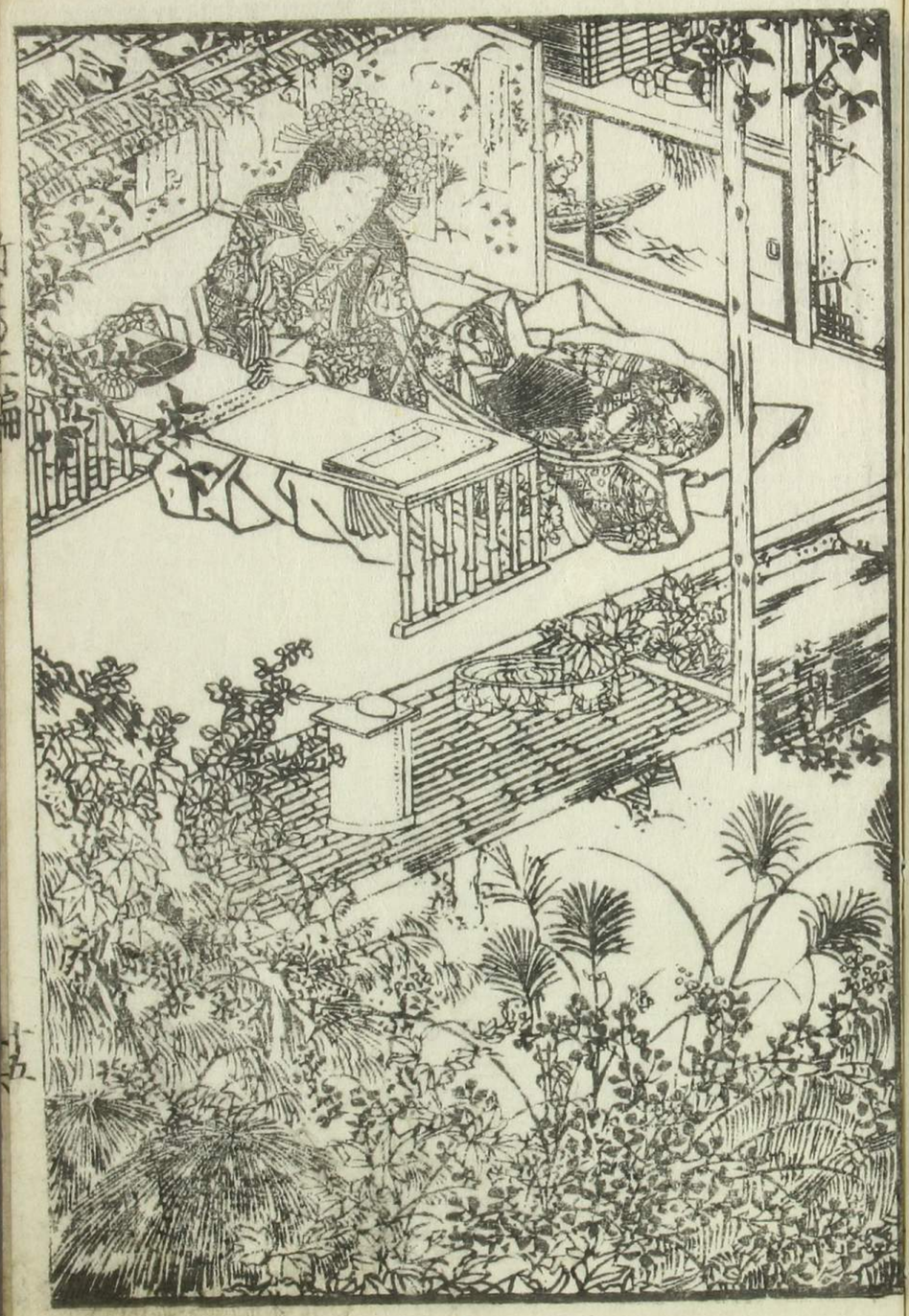
㊁をうしてやをうとゑ人ゆをいうゆ
むの内ひあをさゑそををーわり
きうてゆ母をうあをきこそをうさうれ
ゑをきこそをうさうれ
どもう㊁

㊃かをれいかをーう
そのをオをうそ
おやうーくーいまで
をれをーうをやうら
ぬうをそをぎ
ゆうをそ

かふ
さる
わく
さる

二人のはなかり
三
四

第七
世界出



三の巻

五人の門ぬけ

第十 子安貝の話

第十一　私の鉢の図

第十二　あやめ竹

梅若丸とてそなる限